

ドイツの教育システムにおいて多文化主義が特に重視され始めたのは1960年代であり、西独への移住労働者に関係していた。当時、南欧やトルコから多くの人々が職を求めてやってきたのである。90年代初めに東西ドイツ統一があり、旧東独の学校制度は解体され西独の教育制度に合わせ再編された。こうして、ドイツの学校制度全体がグローバルゼーションと異文化性という課題に挑むことになった。その結果、現在の学術用語としては多文化主義の代わりに越境移動や異質性、国際化、とりわけ異文化性が使われている。

外国人教育のかつての概念は現在の移住者たちには役立たない。今、必要なのは彼らの不十分なドイツ語を補う教育だけではなく、互いに異なる個人同士が協同する教育なのである。「異文化間教育学」はこれを実現しようとしており、異文化相互の関係について考究するものである。その出発点は「異文化の人々が共住している場合、その全員を巻き込んだ相互作用的学習プロセスが必要である」という文化接触についての理論である。

異文化間教育—21世紀の課題

バーバラ・ドリック

また、その前提は、各文化は平等に共存するのであり、ドイツ人と外国人の双方が、ともに積極的役割を担わねばならないという認識である。さらに、この教育の基礎は「文化は絶えず発展する」という動的な文化概念である。

決定的に重要な実践は、他の文化について調べ学ぶことである。学校では、他文化圏から来たクラスメイト、特に移民の背景をもつ生徒が異文化を体現しているわけだが、人々は互いにどう違うのかを学ぶのが、この実り多き学習なのである。このような文化観は、支配的文化（前述したように、これも文化である以上、常に変化するのだが）による政治的言語とは対極にある。この学習プロセスの成功には、関係者の意欲と力量が要る。これは相互学習的異文化間教育学そのものにも当てはまる。私は今後、「難民と彼らの社会統合」というテーマでヨーロッパの現況を分析し、教育システムと職業訓練に役立てたいと考えている。

（原文英語：Barbara Drink / ライプツィヒ大学教授

東洋哲学研究所海外研究員